

## 目次

1. 本年度の編集責任者より
2. 事務局より
3. 昨年度の編集責任者より
4. 昨年度シンポジウム報告
5. 海外大学言語学事情
6. 運営・企画担当より
7. 今後の例会案内
8. 談話会報告
9. メーリングリスト frenchling について
10. 追悼：朝倉季雄先生
11. アンケート

## 1. 本年度の編集責任者より

### (1) お詫びとお知らせ

先ずはお詫びですが、昨年度のニューズレターで2000年度の編集責任者を大阪大学の春木が引き受ける旨をお伝えしましたが、個人的な都合で1年先送りにして頂き、昨年は東北大学の阿部宏さんにお引受け頂きました。阿部さんには突然のことでご迷惑をおかけしました。ということで、昨年度は阿部宏さんが編集責任者、青木三郎さんが副編集責任者をつとめられました。ご苦勞様でした。本年度は春木仁孝が編集責任者を、藤田知子氏が副編集責任者をつとめます。

### (2) 投稿と査読について

昨年のニューズレターでも投稿について、投稿規定の変更その他注意して頂きたい点を説明しましたが、本年度も査読者責任者会議で問題になった点などを中心に少し補足させて頂きます。

まず、投稿される方は『フランス語学研究』に記載の投稿規定をしっかりと読んで投稿してください。

投稿規定を守ったうえで投稿して頂くのが最低限のルールですが、最近、毎年のように1ページの行数や1行の字数を守っていない投稿原稿があります。1行の字数についてはソフトの性質上、多少出入りが起こってしまうものもあるのかも知れませんが、公平を期すためにも出来るだけ投稿規定に従ってください。

また、注の部分のポイントを小さくして打って来られる方が多くおられますが、確かに印刷では注の部分は小さくなりますが、投稿規定の分量は本文と注を区別したものではありませんので、投稿原稿でも注は本文と同じポイント、同じ字間・行間で作成してください。これは参考文献についても同じで、基本的には本文の全角に対する半角であり、アルファベットのポイントをそれ以上に小さくしないようにしてください。

投稿原稿の採否については、常識的に考えて頂ければお分かりになると思いますが、オリジナリティーということがもちろん一番重要な基準ですが、先行研究の検討がきちんとなされて

いるか、論旨に一貫性があるか、分析や仮説に十分な説得力があるか、といった点が採否の決定の要素になります。場合によっては新しい言語事実の発見や分析が含まれているものや、また現象によっては先行研究の批判的検討と筆者なりの総括が意味を持つような場合は、そのような論文も採用の対象になります。

内容に多様性をもたせ、できるだけ様々な情報を会員の皆さんにお届けしようという主旨で、論文以外にもいろいろな欄がありますが、企画ものや新刊紹介などはどうしても依頼原稿が主になります。こういった依頼原稿も含め全ての原稿が査読の対象になり、間違いや理解しづらい点、不都合がないかなどがチェックされます。もちろん、執筆者が編集委員の場合も同様に査読が行われます。

### (3) 編集委員の交替について

本年度は次の二人の方が編集委員を辞任されました。

曾我祐典氏、鳥居正文氏

また、次の方が編集委員に新任されました。

渡邊淳也氏、藤田知子氏

---

## 2. 事務局より

事務局は引続き大阪大学言語文化部に置かれています。事務局への連絡は、基本的には郵便または電子メールでお願いします。住所変更、所属機関の変更等があった場合は、できるだけ早く事務局の方までご連絡ください。転居先不明で郵便物が戻って来るケースが増えています。

本年度あるいは過去年度の会費をまだ納入されていない方は、下記の郵便振替口座に振込をお願いします。

郵便振替口座番号 00160-6-56308

数年前から、人手と効率の問題から、春の仏文学会の開催期間中ずっと会費納入などのために受付を設置することをやめています。御不便に感じられておられる方もおありでしょうが、ご理解をお願いします。今年は少しパターンが変わりましたが、基本的には金曜日午後のシンポジウムと土曜日午前の例会に合わせて、開催場所で開催時間中に受付を開いています。できるだけその機会を利用のうえ、会費の納入、機関誌の受け取りをお願いします。現在、他学会でも会費納入方法の効率化がはかられています。（振込への一本化やカード引き落としなど。）当学会でも将来の課題として検討していく必要があります。

2年以上会費を滞納されますと、学会誌の送付を停止させていただきます。なお、『フランス語学研究』のバックナンバーの購入は、フランス図書に販売を委託していますので、直接フランス図書にお申し込みください。既に品切れの号もいくつかありますが、かなりの号についてバックナンバーの購入が可能です。

例会は1月、2月、3月、8月以外の毎月、1年に計8回開催されています。会場は3年交替で担当していますが、現在は早稲田大学に会場をお世話頂いています。11月は通例、京都で開かれます。例会の案内を郵送で希望される方は、ご自分の住所氏名を表書きした葉書を10枚程度、事務局までお送りください。（なお、お名前は『...行』ではなく『...様』としてください。）なお、例会の案内は、白水社の『ふらんす』や大修館の『月刊言語』、また学会のホームページやメーリングリストのfrenchlingでもお知らせしています。郵送の事務を軽減するため

に、できるだけこれらの手段をご利用ください。（frenchlingについては後出の関係記事を参照してください。）ただし、春の仏文学会の折りの例会や、シンポジウム、特別発表などについては会員の皆さん全員に郵送でも御案内しています。その際、可能な範囲でその他の例会の予定も御案内しています。現在、これらの郵送の仕事は名古屋大学の奥田智樹氏にお願いしています。

『フランス語学研究』には寄贈論文目録の欄がありますが、寄贈して頂いた論文を保存・活用する場所や手段がありませんので、今後は会員の方々が執筆された論文の目録という形に変更させていただきます。それにともない、今後は抜き刷り等を送って頂くのではなく、論文のタイトル、発表年、掲載雑誌名、掲載頁等、必要な情報だけを事務局までお知らせください。また、国内国外を問わず最近提出されたフランス語学関係の修士論文や博士論文についても、ご存じの情報をお知らせください。もちろん自己申告でも結構です。いずれも、情報として『フランス語学研究』に掲載させていただきます。（春木仁孝）

### 3. 昨年度の編集責任者より

今このニューズレターとともに、出来上がったばかりの『フランス語学研究』第35号を手に入れていることと思います。一般会員の皆様はこの雑誌がどのような過程を経て刊行に至っているか、必ずしも詳しくはご存じないのではないのでしょうか。そこで第35号の編集責任を担当した者として、編集過程や投稿時の注意点をご説明致したいと思います。

まず原稿の締切は毎年11月の末です。正式には事務局に送っていただくこととなりますが、巻末に掲載された編集委員のどなたかに預けてくださってもかまいません。論文には欧文レジュメが必要になりますが、必ず前もってインフォーマント・チェックを経たレジュメを添付してください。

「論文」や「研究ノート」の投稿を希望される方は、ぜひ事前に例会で研究発表をしていただくことをお勧めいたします。例会は年8回程度（各2名、原則各月第3土曜日午後3時より）行われておりますが、希望者はできれば半年以上前にお近くの編集委員にご相談ください。発表はご自分の研究内容や論証過程を相対化しかつ発展させる絶好の機会ですので、積極的に発表を行い、質疑応答の内容を原稿に反映させるようにしてください。

特に若い院生の方の発表や投稿原稿についていえることですが、内容は本質的によいものでありながら、表現面で舌足らずなものになり、評価で損をする場合があります。またごく一部の研究者にしか理解できない理論に全面的に拠って立ち、事例の考察に乏しいことがあります。事前に研究会等で知り合った先輩の会員の方に相談しアドバイスを求めることは、遠慮すべきことではなくむしろ進んで行うべきことですので、内容のみならず形式面でより理解しやすいものにするべく事前の準備をよろしく願います。

例会以外にも、有志による「関西フランス語研究会」、慶応での「フランス言語学を一緒に勉強する会」などもほぼ毎月勉強会を行っておりますので、こちらの方へ参加したり発表することも大いに勉強になりますし、見落とししていた関連文献などを指摘してもらえらるメリットもあります。

さて、投稿された全原稿は編集委員による査読にかかることとなります。結果は1月中旬から下旬にかけて執筆者に伝えられます。採用となった原稿も書き直しを求められますので、内容については査読コメント、形式については同封された「執筆要項補遺」を参考の上書き直しを施し、ほぼ1ヶ月後くらいに最終原稿を完成させる（プリントアウト原稿とフロッピーを提出）こととなります。

著者校正は、初校1回だけですが、これは3月末か4月初めに執筆者の元に送られます。投稿から初校までのこの間、編集責任者が最も頭を悩ますのは各執筆者の現住所の把握です。連絡先は投稿原稿表紙に記入しなければならない決まりになってはいますが、春休みの期間を含む

ことにもなりますので、一時的に住所が変わってしまう方がいるからです。したがって執筆者で住所変更を予定されている方は、編集責任者まで早め早めに連絡をお願いします。

その他のジャンルの「論評」、「語法ノート」、「新刊紹介」などへも積極的な投稿が期待されます。「展望」、「文献案内」は研究案内の意味を兼ねておりますので、編集責任者や編集委員が適任者に執筆をお願いする場合がありますが、これも依頼原稿ではありませんので掲載されるのは査読を通ったものだけです。「海外雑誌論文目録」は、情報収集や校正の任にあたる編集委員の汗と涙の結晶です。海外のフランス語学関係の雑誌にもこうしたジャンルはないことが多く、またあったとしてもこれだけの情報量のものは類を見ません。日本におけるフランス語学研究発展への祈りが込められたものといえるかもしれません。

今回は「誌上討論」、「対照研究」という新企画を考えてみました。前号まではコンピュータ利用法などを扱った「情報ファイル」というジャンルがあり、これも廃止した訳ではありません。また編集委員の中には、数年スパンの共同研究を常にいくつか立ち上げておいて、成果を随時学会誌に反映させてはどうか、という意見もあります。会員の皆様も学会誌を豊かにするアイデアがありましたら、お知り合いの編集委員までぜひお寄せください。

(阿部宏)

---

## 4. 昨年度シンポジウム報告

2000年5月19日に開かれたシンポジウム「フランス語をめぐる言語と国家の問題について」の準備はおよそ半年前から始めましたが、その時、特に心がけたのはなるべく「具体的、個別的事実にこだわること」、「国家の側から個人を見るのではなく、個人の側から国家を見る」ということでした。それが具体的にはどういうことになるかは分かりませんでしたし、シンポジウムとして、まとまりのある成果を得ることができるとどうかも自信はありませんでした。それでもこの点にこだわったのは、この種のテーマが取り上げられる時、とかく大所高所的な発言に偏りがちで、言語の内実に触れるような話を聞く機会というものが少ないのではないかという印象を持っていたからです。

そこで、このシンポジウムでは、「自分は何者であるか」という問い、すなわち「アイデンティティの問題と切り離すことができないものとしての言語」という視点を中心にして話をしてもらえよう、パネリストの方々にお願いしました。準備期間中、パネリストの方々と何回か打ち合わせをする中で、多くの収穫と成果がありました。本番のシンポジウムでは(司会の私の不手際もあって)、そのごく一部しか披露できなかったのも、また別の機会にこのようなテーマでの発表や意見交換の場があればと思っています。心残りは、当日、同様の趣旨のシンポジウムと時間的に重複したために、折角の貴重な話を聞くことができる機会を十分に生かせなかったことですが、これは今後の検討課題だと思います。(前年度運営担当 大久保伸子)

---

## 5. 海外大学言語学事情

～～カリフォルニア大学サンディエゴ校～～

University of California, San Diego

州内に9つのキャンパスがある州立のカリフォルニア大学の一つだが、独自に学長をもち、規模から言っても一つの総合大学とみなしてよい。カリフォルニアにはこれ以外に「カリフォルニア州立大学」があり、サンディエゴにはサンディエゴ州立大学があり、かなり紛らわしい。よくUCSDという略称で呼ばれている。

言語学は言語学科と認知科学科で学べる。言語学科には「認知言語学」の顔ともいべきR. Langackerがいて、彼のもとに多くの客員研究員が世界中から集まってきている。他にはD. Perlmutter, M. Polinsky, J. Mooreといった人達がいる。一方認知科学科には学科長のG. Fauconnierがおり、言語学者としてはS. Coulsonがその弟子として育っているようだ。授業は3セメスターに分かれていて、セメスターごとに開講されるため、開講されない教授の授業もある。ちなみに春学期はLangackerもFauconnierも大学院の授業は持っていない。ただし、それぞれの授業は最低でも週二回、多いものは週三回あって短期集中型である。大体は教科書や参考文献が示され、それを読んでいることが前提の講義が行われる。また二回に一回は宿題が出るので、まじめに出席するのはかなり大変である。概して学生は授業中もよく意見を言う。講義も大体は対話型で、優秀な教師は学生の返答に応じて話を進ませていく、突拍子もない返事からもちゃんと話したい方向にもっていく力量は見事と言うほかない。授業以外にはFauconnierが研究会を組織していて、客員研究員や教官、大学院生達が活発な議論を繰り返している。図書などは実に充実していて、英語の本はもちろん、フランス語や日本語の本も豊富に揃っている。国語学や日本語学の本も日本の大学と変わらないくらい揃っている。

(井元秀剛)

---

## 6. 運営・企画担当より

運営・企画担当は、通常の例会、特別例会、シンポジウム、パネルディスカッションなどを企画しています。運営・企画は、青木、ドルヌ（関東）、大木、木内（関西）が担当しています。昨年度は、5月にシンポジウム「フランス語をめぐる言語と国家の問題について」（於明治学院大学）、9月にピエール・カディオ（パリ第8大学）の講演会（於早稲田大学）が開催されました。今年度は、「ことばと視点—日本文学の仏語訳をとおして」というテーマで行います。通常の例会は、昨年12月に第191回を迎え、今年度も7回を予定しています。大学院生を含め、若手の研究者と中堅、ベテランの研究者の発表をなるべくバランスよく企画しています。

日本フランス語学研究会から日本フランス語学会に名称を変更して、11年が経ちます。その趣旨は、二つあります。一つは、従来に増して、日本フランス語・フランス文学会と相互に連携して我が国のフランス語学の学術活動を発展させていこうというものです。さらに、もう一つは、幅広く、一般言語学、フランス語学以外の個別言語の研究者とも交流しながら、独自の例会、研究会、講演会などを行える態勢を作っていこうというものです。（『フランス語学研究』第24号「学会名変更について」をご参照ください。）この10年余り、その趣旨に沿って、運営・企画もいろいろな工夫をこらしてきました。けれども、急速に変化する研究状況に柔軟に対応するには、まだ、努力が必要だと思います。会員の皆様の助言や援助が今ほど必要だと痛感することはありません。これからも、斬新なアイデアなど、運営担当までご連絡くださるようお願いいたします。

(青木三郎)

---

## 7. 今後の例会案内

本年度7月以降の例会は以下の予定で行います。発表題目などが変更されることもあります。学会ホームページ（URLは最後のページ）および frenchling に最新情報が掲載されますので、ご確認くださいようお願いします。

7月7日（土）3時～6時（特別例会）

青山学院大学14509号教室（総研ビル5階）

Maurice GROSS (Univ. de Marne-la-Vallee) :  
Temps et aspect en français. Les compléments de temps

7月21日(土) 3時～6時(第194回例会)  
早稲田大学文学部第1会議室(33号館第1研究棟2階)  
ミニ・クロック<フランス語学の潮流>  
渡邊淳也、川島浩一郎、安西記世子、喜田浩平

9月29日(土) 3時～6時(第195回例会)  
早稲田大学文学部第7会議室(39号館第2研究棟6階)  
戸部篤「不定詞文の発話構造」  
東郷雄二「未定」

11月3日(土)(第196回例会)  
名古屋外国語大学(予定)  
渡邊淳也「証言性について」(仮題)  
佐藤正明「複合過去について」(仮題)

11月18日(日)(第197回例会)  
(土曜日ではなく日曜日ですので注意して下さい)  
京都大学人間・環境学研究科棟B23  
平塚徹「未定」  
発表者1名未定

12月15日(土)(第198回例会)  
早稲田大学文学部(予定)  
佐藤淳一「未定」  
春木仁孝「未定」

例会発表希望者は、事務局(または編集委員、運営委員)を通じて、発表希望の3ヶ月前までにお申し込みください。  
(青木三郎)

---

## 8. 談話会報告

### ◎第33回フランス語学談話会

平成12年11月18日に、京都の京大会館で、「いわゆる総称をめぐって」という統一テーマのもと、第33回フランス語学談話会が開催された。総称というテーマが選ばれた理由のひとつは、同年6月24日に早稲田大学で開かれた日本フランス語学会の186回例会で、東郷がMa mere est morte al'hospital. 型の定名詞句を、「内包指示」する分析を批判したのが発端で、frenchling上でひとしきり論争が続いたからである。

当日、長沼圭一氏(筑波大学博士課程)は、「定名詞句の内包的解釈について」と題して、内包解釈を擁護し、定名詞句が属性との結びつきが強いときは内包的用法になり、役割・関係との結びつきが強いときは準内包的用法であり、これはメンタル・スペース理論という役割名詞句に相当するという趣旨の発表をした。西村牧夫氏(西南学院大学)は、「定冠詞は総称の限定辞である」と題して、定冠詞の用法を、総称を基本として徐々に特定化されることのでいわゆる定の用法が生じたとするユニークな見方を示した。井元秀剛氏(大阪大学)は、「メンタルスペース理論における総称名詞句」と題して、「内包を指示する」とする見方を批判し、Ma

mere est morte al'hopital. 型の定名詞句を役割名詞句とする分析を主張した。この分析では、値が一意的に定まらない用法をすべて役割名詞句とすることで、一貫した説明ができるとされている。

会場からは活発な質問が相次いだ。テーマそのものが複雑なのに加えて、用語上の問題もあり、十分に討論できなかった恨みは残るが、有意義な談話会であったと言えよう。なお、司会は東郷が担当した。(東郷雄二)

### ◎第34回フランス語談話会

第34回フランス語談話会は、2001年3月17日、慶応義塾大学三田キャンパスにおいて開催された。今回は「動詞(句)の多義性」を共通テーマとして、計3つの発表が行われた。まず日本語について、今井忍氏(大阪外国語大学)が「「出る」の意味拡張について」と題する発表をされ、次いで平塚徹氏(京都産業大学)に「統語的複合動詞「～だす」について」と題して発表された。今井氏と平塚氏は「「でる・だす」の多義性の問題」という題目での共同研究を進めておられ、今回の発表もその成果の紹介であった。次にフランス語について戸部篤氏(筑波大学大学院)が「形式の同一性と解釈の多様性 — 独立した発話を構成する不定詞句について」という発表をされた。それぞれの発表に続いて参会者と発表者のあいだで時間を超過するほど活発な討論をすることができ、有意義な会になった。なお、司会は石野好一氏(東京都立大学)が担当された。今回の各発表の要旨は、次回の談話会の案内の折にお伝えする予定。

(喜田浩平・渡邊淳也)

---

## 9. メーリングリスト frenchling について

frenchling はフランス語学関係のメーリングリストで、大阪大学言語文化部でお世話させていただいています。フランス語、フランス語研究、関連の研究会、講演会、当フランス語学会関係その他、広くフランス語関係の情報交換・情報伝達や、フランス語についての議論の場として開かれています。フランス語研究を専門にされている方だけでなく、広くフランス語の問題について興味のある方ならどなたでも参加できます。参加を希望される方は、以下のアドレスまで参加希望の旨をお知らせください。その際、名前(読みのローマ字を添えてください)、住所、所属、電話番号、受信のためのメールアドレスを明記してください。

申し込み、問い合わせアドレス

なお、当メーリングリストの過去メールはフランス語学会のホームページで読むことが出来ます。これまでには半過去や限定詞などについての活発な議論がありました。興味のある方はのぞいてみてください。(春木仁孝)

---

## 10. 追悼：朝倉季雄先生

皆さんご存じのように、この4月に朝倉先生が逝去されました。フランス語学会としても次号の『フランス語学研究』に正式の追悼記事を載せる予定です。また、先生が残された膨大な資料の一部を西南学院大学の西村牧夫さんが譲り受けられたということですので、次号にその資料についての記事をお願いする予定です。

正式な追悼記事とは別に、ここに少しばかり私的な感慨を記すことをお許しください。丁度私達がフランス語を学び始めた頃は、NHKのフランス語ラジオ講座は初級が朝倉先生、中級が福井芳男氏の担当という組合せが暫く続いていた時代でした。大学でフランス語を勉強する

つもりだった私は、高3のときに受験勉強をしながら朝倉先生のラジオ講座を聞いていました。大学に入ってからもう一年、当時は一年単位だった初級講座を聞いた記憶があります。そういう訳で、一度もお会いする機会はなかったものの、朝倉先生のお声とその口調は30年たった今でもはっきりと耳に残っています。

フランス語の世界で仕事をするようになり、是非一度お目にかかりたいと思っておりましたが、語学会の例会などで頻りに東京に行くようになった頃には、朝倉先生は既に引退されており、残念ながら一度もお会いする機会はありませんでした。そうこうするうちに、朝倉先生の論文とエッセイを集めた『フランス文法論』が1988年に出版されました。それぞれの論文の後には、注記として先生の論文が発表された後に当該の問題について書かれた論文が挙げられていましたが、非人称の論文の後に私の論文も挙げて下さっており、それだけでも大変嬉しく思っていましたところ、木下光一先生から『フランス語学研究』にこの本の書評を書くようにと依頼を受けました。たいていのことには「まあ、何とかなるやろ」と高をくくる私も、正直言ってこれはかなりの難題だと思いました。そして、お引受けした結果が『フランス語学研究』第24号に掲載された書評です。実はこの後、朝倉先生から直接お手紙を頂きました。まさか朝倉先生が私の口の悪さをご存じだったわけではないでしょうが、先生のお手紙には私が先生の著書を取り上げて書評を書いているというので「はらはらしながら読みました」とありました。おいくつになられても、このような初々しい気持ちを持たれているのに触れ、フランス語への飽くなき探求心の源泉をかいまみた思いでした。でも朝倉先生のラジオ講座でフランス語の勉強を始めた私としては、その先生の論文集の書評を書かせていただくということ自体が感慨の深いものでしたが、実は書きながら「はらはら」だったのは私の方だったというのが本音です。朝倉先生は当時『文法辞典』の改訂をなさっていると聞き及んでいましたが、先生は私の書評を読んで「また少し元気が出てきたような気がしました」とも書いてくださいました。『文法辞典』の改訂が完成していればと思うのは私一人ではないでしょう。

手紙という形でたった一度だけとはいえ、先生と直接、言葉を交わすことが出来ただけでも書評を引き受けて良かったと思えました。私は形だけの決まり文句は口に出来ない人間ですが、本当に心から朝倉先生のご冥福をお祈り申し上げます。そして、フランス語を研究する者の一人として、朝倉先生、ありがとうございました。  
(春木仁孝)

---

## 11. アンケート

昨年に引き続き、最近読んだ言語や言語学、フランス語関係の論文や本で面白かったものを、簡単なコメントとともに紹介してもらおうというアンケートを行いました。本当は、もっといろいろな人からの投稿を期待してfrenchlingでも呼びかけましたが、いまのところ編集委員からの回答が中心です。なお、形式の不統一はご寛恕下さい。多少、言葉遣いなどこちらで変更させていただいた場合もあります。回答をお寄せ下さった、皆さん、その点ご了承下さい。協力して下さいの方々、どうもありがとうございました。

◎ 井元 秀剛~~~~~

(1) Saeed, J.I. (1997): *Semantics*, Basil Blackwell.

教科書用に書かれた「意味論」の入門書。平易な英語で書かれているが、内容は古典的意味論から形式意味論、認知意味論までカバーする。練習問題もついていて、学部の副読本に最適。UCSDでは、学部の意味論の教科書として採用されている。

◎ 阿部 宏~~~~~

(1) 大野晋(2000): 『日本語の形成』 (岩波書店)



日本語・タミール語（南インド）同系説を主張する一連の研究の集大成。大部分は音韻対応の指摘であるが、歌の韻律の形式や係り結びにも共通性が見いだされるとする。なお『日本語はどこからきたのか』（中公文庫 1999）はより一般向け概説で、岩波版にはない文化・風習の対応にも言及している。

(2) Travaux de linguistique 36 (1998), Duculot.

文法化特集号。une fois, comme, le fait que, facon など大部分がフランス語の言語現象の分析で、Melis と Desmet による理論概説もついている。これまで、フランス語が文法化研究の対象になることが少なかつただけに貴重な特集号。

(3) E. V. Sweetser、澤田治美訳 (2000)：『認知意味論 の展開』、研究社出版。

From Etymologie to Pragmatics (1990) の邦訳だが、「訳者まえがき」は簡潔ながら優れた理論概説。訳注も豊富で、日本語用例提示や概念解説にあてられている。原著とはまた別に読む価値がある。

◎ 小熊 和朗~~~~~

(1) 瀬戸賢一 (1997)：『認識のレトリック』（海鳴社）

メタファー、メトニミー、シネクドックを「認識の三角形」として相互に位置づけている点が目から鱗だった。レトリックを言葉のテクニクとしてだけでなく、言語・認識・行動を通底する活動として捉えられているのも魅力的。

(2) 巻下吉夫・瀬戸賢一 (1997)：『文化と発想とレトリック』（日英語比較選書, 研究社）

「翻訳にみる発想と論理」（巻下）は、日本語に特徴的な「『端』の拡張」や日英語で何が表現間の過不足になるのかなのかを指摘。「意味のレトリック」（瀬戸）は日英レトリックの共通面を記述。いずれも、比較とは何かを考える上で示唆的。仏語について、このような仕事を誰かしてくれませんか？

◎ 曾我 祐典~~~~~

(1) Maingueneau, D. (1998) : Analyser les textes de communication, coll."Lettres Sup", Dunod.

新聞・雑誌の記事、ポスター、広告などを題材に、談話分析の方法を示してくれる。

(2) Volkovitch, M. (2000) : Verbier, Herbier verbal a l'usage des ecrivants et des lisants, Maurice Nadeau.

優れた語感をそなえた翻訳家（読書家）がフランス語の響き、語の選択、語順、動詞時称、構文などについてつづった随筆。

◎ 渡邊 淳也~~~~~

(1) Vion, R. (ed.)(1998) : Les sujets et leurs discours, Publications de l'Universite de Provence

(2) Bres, J. et alii (eds.)(1999) : L'autre en discours, Universite Paul Valery.

(3) Rosier, L. (1999) : Le discours rapporte Duculot.

(1) (2) (3) のように、最近、フランスでは、言説における他者性について関心が高まっているようです。特定の構文や形態に固有の問題ではないせいか、まだまだ未開拓の領域でもあり、個人的には強い興味をもっています。

(4) 清水義範 (1998)：『パールのようなもの』文春文庫

(4) は一見言語学とは関係ありませんが、概念の類似性とその言語的表象について考えさせられます。

◎ 三藤 博~~~~~

(1) 福井直樹(2001) 『自然科学としての言語学』 (大 修館書店)

生成文法の第一人者の雑誌寄稿をまとめたもの。著者は非常に幅広い学識の持ち主で、収録された文章も理論内部の専門的な点は最小限に抑えつつ生成文法の最新の立場を広い視野から解説している。新たに書き下ろされた「日本の理論言語学\_教育と研究」は、読んでいて本当に身につまされる内容。

◎ 青木 三郎~~~~~

(1) Nanine Charbonnel & Georges Kleiber (1999) : La metaphore entre philosophie et rhetorique , PUF,245p.

認知言語学の発展にともない、言語活動の根本にレトリックを見出す流れが出来あがった。本書は、レトリックをテーマに、文学者(詩人)と哲学者と言語学者が、それぞれの見解を開陳する場である。その試みは興味の尽きない。通読してはつきりしたことは、言語学者は、レトリックの一般的なメカニズム(主にメタファーとメトニミーのプロセス)にメスをいれ、哲学者は、レトリックのコンセプト(古代・近代・現代)を問題にする。それはアリストテレスの、ビコの、ニーチェのレトリックである。詩人は、レトリックを通じて、到達しえない世界に橋をかけようとする。詩人だけが、現代という時代と、世界と、ことば(レトリック)を真剣に引き受けようとしている、という読後感をもった。

(2) Jean-Toussaint Desanti(1999) : Philosophie : un reve de flambeur, Grasset, 336p.

本書は、数学者でもあり、哲学者でもある、デサンティの口述筆記録である。「哲学とは何か」という問いから始まり、延々と話しが続く。フランス人は、定義から始めるのがほとんど生理的必然性であるが、デサンティは言う。「ポーカーをしているギャンブラーに、ポーカーとは何か、とたずねてごらん。まさかポーカーのルールや作戦を教えるだけで満足はできないだろう。ギャンブラーには、ポーカーへの愛、特異な情熱があつて、身体の中にまで浸透しきっているんだ。そんな人に、ポーカーとは何ですか、と聞いたところで、答えられるわけがないだろう。たかだか、君もポーカーに賭けてみろ、そうすれば、少しは、分かるだろう」では、賭けるとは、何か。このようにして、知らない間に、デサンティの思考の世界に引きずられていく。「言語学とは何か」に置き換えても、事情は同じだろう。「言語の科学」と言って、満足できる人がいるだろうか?

(3) Guy Serbat (2001) : LE P.C.F. ET LA LUTTE ARMEE 1943-1944. Temoignage. Memoires de l'ancien commandant militaire en second des F.T.P. de la zone sud

語学研究者の中では、セルバはラテン語学者として、またCas et fonction (PUF刊)の著者として知られているが、今年3月にお亡くなりになった。第二次大戦中にゲシュタポの手から逃れ、南仏を中心に、第35部隊作戦を展開した軍人としてのセルバの記録である。この戦争体験と彼の戦後の学問との間にどのようなつながりがあるのか、よく分からないが、深いヒューマニティのにじみ出る本である。

◎ 藤村 逸子~~~~~

(1) Mollard-Desfour, A. (1998), Le dictionnaire des mots et expressions de couleur du XXe siecle, Le Bleu, CNRS Editions

(2) 同, (2000), ----, Le Rouge, ----

Frantextを始めとする多数のコーパスから得たデータをもとにして編まれた色の辞典。bleu, rougeが刊行済みで、今後rose, jaune, vertの順で出版される予定。色名辞典によく付いているような色見本はこの辞書に一切無く、コロケーションが豊富な用例とともに記述されている。rouge一語だけで100ページ分あり(bleuは60ページ)、言語の世界の膨大さに圧倒される思いがする。もちろん、派生語や近似した色を表す語の記述も豊富である。bleuには色彩の歴史学者のPastoureauが、rougeにはSonia Rykielが序文を寄せている。

◎ 春木 仁孝~~~~~

(1) 沖縄オバア研究会(2000)『沖縄オバア列伝』(双葉社)

沖縄のオバア達の生態を通して沖縄文化と琉球語の一端に触れることが出来る。笑えて、言葉にも少し触れることの出来るお勧め本です。

(2) JOY FM、タウンみやざき(2000)『やっちゃん宮崎人』(鉦脈社)

FMみやざきのDJ番組の方言コーナーを辞書風にまとめた気楽な本。方言の豊かさが実感できます。海外の空港で乗り換えに不安を感じた宮崎人の義妹が受けたアドバイス、「そんげなときは行き先を”おらんでさるけ”！」(=叫んで歩け)

(3) 卍尼恩比丘(1994)『宮崎方言版小倉百人一首』(鉦脈社)

方言ついでにこんな本もあります。この本は傑作です。(ふざけた本では全くありません。)  
「はらアすぎち なたアきたごたる まっしりィ ベベがほしちやる 天(あま)んかぐ山」(これは分かり易い例です。)

◎ 前島和也~~~~~

(1) 渡辺実『さすが!日本語』(ちくま新書2001)

『国語構文論』、『日本語概説』などで知られる著者が「せっかく」「どうせ」「いっそ」など16語の意味を現代日本語の例を中心に論ずる。学術書ではないが、モダリティーに関して示唆に富む指摘が多く、言語学のゼミにも使えそうな一冊。

---

## 12. 研究会便り

(1) フランス言語学を一緒に勉強する会(関東)

原則として第2土曜日に慶応義塾大学で開いている勉強会です。去年は以下のような発表がありました。

4月15日(土) 中尾和美(フェリス女学院非常勤)

「Jean, les yeux fermes タイプの同格について」

5月13日(土) 須藤佳子(東京大学DC)

「voirの助動詞的用法について」

6月10日(土) 塩田明子(慶応義塾大学非常勤)

「話し言葉におけるいわゆる present de narration について」

7月15日(土) 小熊和郎(西南学院大学)

「ダケ/バカリとseulement」

9月16日(土) 山根祐佳(筑波大学DC)

「S+V+X+comme+Y型文について」

10月14日(土) Daniel Lebaud (Universite de Franche-Comte)

「Pluriel et transcategorialite」

11月4日(土) 市川慎一(早稲田大学)

「カナダの言語事情--アカディアとケベック」

1 2月2日 (土) 高田大介 (早稲田大学DC)

「分離の aについて」

4月14日 (土) 野田弘子 (早稲田大学修士課程修了)

「単独で用いられる否定のNE」

5月12日 (土) 喜田浩平 (慶応義塾大学)

「Quoique 再考」

予定のお知らせはフレンチリングおよび郵送で行っています。フランス語学・言語学に興味をお持ちの方は世代を問わずぜひご参加下さい。発表ご希望の方は世話人まで。(世話人：川口順二, 藤田知子)

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

## (2) 関西フランス語学研究会

毎月第3、または第4土曜日に、大阪日仏センターで関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。気楽な会ですので、言語学に興味のある方でしたら、関西の方に限らず、どなたでもいらしてください。最近では次のような発表がありました。

6月17日 田中善英 (獨協大学大学院)

「定名詞句の無標性 - 定冠詞に指示機能はあるのか」

9月30日 安西記世子 (大阪大学非常勤)

「認識・感情を表す動詞の複合過去形に関する考察」

11月11日 上田誠人 (大阪外国語大学大学院)

「オキシモロンと隠喩の相関」

1月13日 平塚 徹 (京都産業大学)

「疑問詞疑問文における倒置について」

2月17日 東郷雄二 (京都大学)

「定名詞句の『外部指示用法』は存在するか? Attention ala voiture! の意味論」

3月24日 福島祥行 (大阪市立大学)

「指示の生成過程考察へ向けて」

4月21日 南 秀聡 (京都大学大学院)

「代名動詞の受動用法と中立用法」

5月26日 金子 真 (大谷大学非常勤)

「『出来事読み』代名詞について: stage を表す定名詞句として」

発表を希望される方は木内までご連絡ください (tel & fax : 06-6366-2182 または e-mail: kinouchiアットマークpost01.osaka-gaidai.ac.jp)。

---

～編集後記～

『ニューズレター』第9号です。昨年、来日言語学者へのインタビューを載せることがで

き、今年も是非継続しようと思っていたのですが、準備に少し出遅れてしまい実現することが出来ませんでした。申し訳ありません。昨年来日されたCadiot氏またはBorillo氏に電子メールでいつでも出来ると考えていたのが、かえってあだになりました。やはり、来られたときに直接してもらっておくほうが確実なので、今後はそのようにして早く準備するように申し送っておきます。今年度は私は編集責任を担当する予定ですので、次号のニュースレターの編集はどなたかに替わって頂く予定です。

ニュースレターのバックナンバーは学会のホームページで見ることが出来ます。新入会員の皆さんは、是非一度これまでのニュースレターをご覧ください。

本号の企画・編集は春木仁孝（大阪大学）が、レイアウトと版下製作は東郷雄二（京都大学）が担当しました。アンケートや記事を執筆して下さいの方々、ありがとうございました。

（春木仁孝）

学会ホームページのURL

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>

事務局のメールアドレス

flsアットマークlang.osaka-u.ac.jp